

合成黄体ホルモン剤投与による排卵時期のコントロールについて

○明石夏澄, 木下克利, 塚田仁次, 近藤圭佑
(マリンワールド海の中道)

2020年5月から2022年9月までの間に鯨類の計画的な繁殖を行うために合成黄体ホルモン剤(以下ホルモン剤)を投与し, 排卵時期の調整を行い妊娠に至ったので報告する。供試個体は性成熟年齢に達している4個体で, 2020年はバンドウイルカ1個体(血統登録番号440:以下個体A), 2021年はカマイルカ2個体(血統登録番号307:以下個体B, 血統登録番号461:以下個体C), 2022年はバンドウイルカ1個体(血統登録番号307:以下個体D)である。供試個体はすべて20日間連続投与を1クールとし, オス個体との同居開始前にホルモン剤の投与を開始した。2020年は, 個体Aへホルモン剤を投与した。ホルモン剤の投与終了後, 定期的に超音波画像診断装置にて卵胞の有無, 排卵および黄体の確認を行った。ホルモン剤投与終了38日後に黄体らしきものを確認し, その数日前に排卵があったと思われるが妊娠に至らなかった。さらに投与終了49日後に次の排卵があり, その後妊娠を確認した。2021年は, 個体BとCの同時期の出産を避けるため, 時期をずらしてホルモン剤を投与し, 出産時期の調整を試みた。個体Bは投与終了16日後に排卵を確認し, その後妊娠に至った。個体Cは以前から卵胞の発育不良があったこともあり, なかなか排卵まで至らず計3クールホルモン剤を投与した。3クール目のホルモン剤投与後, 卵胞の発育・排卵を確認でき, その後妊娠に至った。2022年は, 個体Dにホルモン剤を投与した。投与終了17日後に排卵を確認し, 妊娠に至った。

ホルモン剤を投与して排卵時期をコントロールし, オス個体との同居時期を計画することで効率よく妊娠・出産をさせることができた。また, ショーアウト期間を短縮することができ, ショー出場する他個体の負担軽減に繋げることができた。